

## 引用文献について

pp.358-359 THE INDIVIDUAL PSYCHOLOGY OF ALFRED ADLER より

### 2. EXPERSIONS OF THE STYLE OF LIFE

In my investigations concerning dreams I had two great aids. The first was provided by Freud, with his unacceptable views. I profited by his mistakes. My second and much stronger support in the understanding of dreams came from an established fact, scientifically confirmed and illumined from many sides, the unity of the personality. The property supreme low of both life-forms, sleep and wakefulness alike, is this: the sense of worth of the self shall not be allowed to be diminished.

The findings of Individual Psychology point to the fact that all the behavior of a human beings fits into a unit and is expression of the individual's style of life.

The so-called conscious and unconscious are not contradictory, but form a single unity, and the methods used in interpreting the "conscious" life may be used in interpreting the "unconscious" or "semi-conscious" life, the life of our dreams. Only by considering dreams as one of the expressions of the style of life may an adequate interpretation of them be found.

It may be well to remark that the psychologist is not discouraged if somebody says him, "I will not tell you any dreams for I cannot remember them. But I will make up some dreams." The psychologist knows that the person's imagination cannot create anything but that which his style of life commands. His made-up dreams are just as good as those he genuinely remembers, for his imagination and fancy will also be an expression of his style of life.

私の夢に関する調査で私は2つの大きな助けを得ました。第一はフロイトによって、彼の容認できない見解で提供されました。私は彼の誤りによって利益を得ました。夢の理解における私の第二の、そしてより強力な支持は、確立された事実から来て、科学的に確認され、多くの面から明るく照らされて、人格の統一性です。生活様式、睡眠および覚醒の両方の最高の特性は同様です：自己の価値の感覚は減少してはならない。

個人心理学の発見は、人間のすべての行動がひとつに統合し、個人のライフスタイルを表現しているという事実を指摘している。

いわゆる意識と無意識は矛盾するものではなく、ひとつの単位（ユニット）を形成し、「意識的」なライフスタイルを解釈するのに用いられる方法は、「無意識」または「半意識的」なライフスタイル、私たちの夢のライフスタイル。ライフスタイルの表現の1つとして夢を考えることによってのみ、それらの適切な解釈が見つかるかもしれません。

心理学者は落胆しないでしょう、もしも誰かが彼に「私は覚えていない夢を、あなたにお話することはできません。しかし、夢を作り出すことはできます」と語ったとしましょう。心理学者は、人の想像力は自分のスタイルのスタイルに支配されているのを知っている。彼の作り上げた夢は、彼が本当に思い出す夢と同じようなものです。彼の想像力と空想は、彼のライフスタイルの表現にもなるからです。

p.627~ THE DISCOVERY OF THE UNCONSCIOUS *Alfred Adler and Individual Psychology* より

p.250~ 『無意識の発見(下)』第8章 アルフレッド・アドラーと個人心理学 より

フロイトがアドラーにネガティブな影響を与えたことは確かである。水曜会の議論に際して、アドラーはフロイトを自分とは反対の考え方でヒントを与えてくれることによって彼自身の進み方を見出させてくれる反面教師として大いに利用していたようである。二人の対立点のいくつかをまとめると、次のようになる。

フロイト	アドラー
悲観的思想	楽観的思想
個人自体の内部での分割	個人の本質的分割不能性
因果論優位	目的論優位
自我は超自我から圧迫され、文明によって脅かされる	個人は共同体に対して攻撃的に行動する傾向をもつ
自我の防衛の諸形式。防衛の強さが不十分なとき、行動化(アクティング・アウト)が生じうる	個人の他者に対する攻撃の諸様式。能動的攻撃に失敗したときの「バリケード」
幼児は全能感をもつ(幻覚的願望充足)	子どもは劣等感をもつ(巨人に対するこびとの関係)
リビドーの基本的重要性。リビドーの固着と退行	人間の性的行動の多くは、優越志向に関する象徴的意義を有する
リビドーと攻撃的感情の備給としての対象関係の強調	「相手役」(Gegenspieler = 対抗者)の概念
父母との関係やエディップス・コンプレックスの強調	兄弟との関係や兄弟間の状況の強調
女性はペニスを持たないために劣等感を抱く(男根羨望)	男性は女性よりも能力が限られているために劣等感を抱く
神経症は文明化の不可避の結果で、人間の条件と不可分といってよい	神経症は個人が共同体に対する義務の遂行を逃れる術策
第一次対戦後、フロイトは死の本能の概念を提唱した	第一次大戦後、アドラーは社会本能の概念を提唱した
精神分析療法では患者は寝椅子に横になる	アドラー派の精神療法では患者は治療者と対面して座る

p.571~ THE DISCOVERY OF THE UNCONSCIOUS *Alfred Adler and Individual Psychology* より  
p.189~ 『無意識の発見(下)』第8章 アルフレッド・アドラーと個人心理学 より

アドラーの個人心理学とフロイトの精神分析学との基本的な相違点は、次のように要約することができる。フロイトの狙いは、ギリシャ悲劇の作家たち、シェイクスピア、ゲーテその他の偉大な作家たちによって直感的に見てとられていた人間精神のある隠された領域を、科学的心理学に組み入れるという点にあった。これに対してアドラーの関心は人間知(Menschenkenntnis)の領域に、つまり人間に関する具体的・実践的な智慧の領域に向けられた。個人心理学のユニークさは、それが人間知の完全な体系を — 種々の神経症、精神病、さらには犯罪行為の領域をも包含するこのまことに広大な体系を — はじめて記録して統一的に論じているという点にある。したがってアドラーを学ぶには、読者はこれまでに学んだ精神分析学に関するすべての知識をひとまず棚上げにして、全く違った考え方に頭を切り替える必要がある。